
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第32号 2025年3月

現代の自己疎外への一考察と、自己疎外を主題とした作品制作についての研究

A Study on Modern Self-Alienation and the Creation of Works Focused on the Theme of
Self-Alienation

渡邊 佑也 | WATANABE Yuya

【制作ノート】

現代の自己疎外への一考察と、自己疎外を主題とした作品制作についての研究

A Study on Modern Self-Alienation and the Creation of Works Focused on the Theme of Self-Alienation

渡邊 佑也 | WATANABE Yuya

現代の自己疎外への一考察と、自己疎外を主題とした作品制作についての研究

1. はじめに・研究動機

「自己疎外」とは、G.W.F.ヘーゲルやカール・マルクスなどが提唱した用語として知られる。二人の「自己疎外」の内容には、ある程度違いがあるが、要約すると社会関係の中で自己の個性や人格が埋没し、主体性を失った結果、他者に限らず自分自身を「疎遠」な存在と感じてしまう状態のことを指す。

近年「同調圧力」について議論するテレビ番組やSNSでの発言が目立つようになった。私は現在、「同調圧力」がもたらす悪影響の一つとして、「自己疎外」が引き起こされているのではないかと考察している。

近代の日本の教育現場では「主体的で対話的な深い学び」が推奨されている。これは時代の流れや必要な人材が、大量生産や集団での活動を目的とする一律な思考ではなく、成熟した人格を持ち熟考したアイデアや目的意識を生み出せる個人を必要としているからではないだろうか。しかし、教育現場がそのような人材を輩出できるようになったとしても、現在の社会が同質性を求めて圧力を持って他者を埋没させてしまえば、新たな人材が本質的に成長できる機会は少なくなり、変化する社会に対し閉鎖的な集団ほど停滞していっただろう。本研究において「同調圧力」からなる上記の「自己疎外」をテーマとした作品の研究と制作を行う。また、疎外の「結果」だけでなくその「過程」、そして現状からの打開や解決まで構想したい。

2.G.W.F.ヘーゲルとカール・マルクスの「自己疎外」の相違点について

(1)G.W.F.ヘーゲルの「自己疎外」について

G.W.F.ヘーゲルの「自己疎外」は、主に私たち人間の精神的な成長の過程で起こるプロセスであり、『精神現象学』においてはいずれその経験が成長につながると言われており、この点においてG.W.F.ヘーゲル肯定的な印象を持っている。具体的には『精神現象学』内で提唱されているアウフヘーベン、弁証法を行うための前段階で起こる心理的な変化であると解説されている。自身が持つ常識、偏見などの個人の固定概念や、他者との関わりの中で与えられた社会的地位、立場、ルールなどに対し疑問に思い、客観的に見つめ直すこと、またその状態のことを指す（ヘーゲル2018下）。

(2)カール・マルクスの「自己疎外」について

一方、カール・マルクスの「自己疎外」は主に資本主義社会における人々の労働に焦点が当てられ、疎外からの脱却は個人ではなく、社会システムの変革にあると彼の著書『資本論』内で明記されている。人の労働は「精神的労働」と「肉体的労働」に二分化され、現在の労働者の大体は「肉体的労働」のみを行使させられている、つまり各々で構想したり思考したりする機会を与えられず、機能的で機械的な状態。ある種、人ではなく物として扱われている状況。そのような環境に一定期間身を置くことで、自らの意思で物事を判断することや自己表現に対し消極的となり、自らの精神性を見失ってしまう状態をカール・マルクスは「自己疎外」と呼んだ（マルクス2021）。

(3)「自己疎外」の相違点について

まとめると、G.W.F.ヘーゲルの「自己疎外」とカール・マルクスの「自己疎外」の違いは、大きく二つ挙げられるだろう。一つは「自己疎外」が起こる根底の原因である。G.W.F.ヘーゲルは精神的な成長を通して、カール・マルクスは対社会や労働の中で「自己疎外」を定義している。そして、二つ目に挙げられる相違点は「自己疎外」に対する印象の違いである。G.W.F.ヘーゲルは「自己疎外」を成長の過程で起こる心理的な変化だと定義づけている点から、ポジティブな印象を受ける。一方カール・マルクスの「自己疎外」は労働環境や抑圧的な環境の影響、社会構造が根本にあると語っている点から悪印象を受ける。

3.「同調圧力」から見る現代の「自己疎外」について一考察

私は、現代における「自己疎外」が引き起こされる一要因として「同調圧力」を挙げる。「自己疎外」は自己意識が、社会関係や環境により抑圧されることによって引き起こされる。「同調圧力」は複数他者との関わりによって、マイノリティや個人の主張が抑圧されてしまう環境のことを指す。この「同調圧力」が生み出すいわゆる「空気」や環境が「自己疎外」を助長しているのではないか。

(1)「空気の研究」について

『空気の研究』では、戦時中から近代までに、日本を中心に起きた事件や社会問題を取り上げながら、それら問題の根底的な原因が日本特有の物事の決定手段「空気」に依存しているから、との視点で自己の見解を展開していく。更に述べると、日本のコミュニティーが物事を決断するとき、論理性や科学的根拠を決定打とするのではなく「空気」が最終的な決定権を持っているとのことだ。

私は『空気の研究』内で語られている「空気」という機能が現代の「同調圧力」と関連性が高く、殆ど同義であると解釈している。その理由として「同調圧力」は、社会的(世間的)抑圧や暗黙の了解を意味すると理解しているが、この文献で解説されている「空気」が発生する現場の具体的な例には、社会的立場やコミュニティ全体の感情が論理性や建設的議論以上に重要視され、行動として現れているからである。

S N Sやインターネットが普及し、この文献の執筆当初と現状が異なることは確かだが、「空気」と「同調圧力」の根底的な発生要素や構成要素は似寄り、私は日本の「同調圧力」や現代の「自己疎外」の文脈を知る上で現代にも通ずる、非常に的を射た資料であると考え(山本七平2018)。

(2)「同調圧力の正体」から考察する「自己疎外」と「同調圧力」関連性

私は、現代における「自己疎外」は、カール・マルクスの提唱する「自己疎外」が「同調圧力」により定着され、G.W.F.ヘーゲルが語る精神的な「疎外」の段階で固定化したのが為として主体性の欠如を助長していると考えする。

以下、「同調圧力」と「自己疎外」の関連性について太田肇の『同調圧力の正体』から引用をしたい。

いったん自分ごとになれば心の中の迷いや葛藤は消え、行動にブレーキはかからなくなる。それが結果として多面的思考や、内省の機械を奪うことになりかねない。(太田肇2021:93)

上記の内容について私は、同調圧力のある集団内で自身の承認欲求や存在意義を見出してしまうと、所属する集団を疑うことがなくなり、結果として主体性を持って考え、自ら思考することは無くなってしまおうという認識を持つ。加えて、他者や外的影響により自身の主体性や思考が停滞している点は「自己疎外」の内容と類似する。

これらが現代日本の「自己疎外」であり、「自己疎外」そのものが引き起こされるメカニズムではないだろうか。

4.「自己疎外」の関連作品について

(1)「鴨居玲」について

鴨居玲は人物への高い観察眼に裏付けされた確かな描写力に、彼自身への自傷行為と言えるような荒々しく躍動感あふれるタッチで描かれることで悲壮感や陰鬱とした雰囲気醸し出される絵画を制作していると考察する。

鴨居玲の生涯の特徴として、海外を転々としながら取材をしていたことが挙げられる。特に、スペインでの滞在は、密着した人間関係と風土、当初の国民性などから、直に肌で

感じ取り、主観性と自己の人格を重ねた、充実した作品が生み出されるきっかけを作ったと私は、作品を鑑賞して感じとることが出来た。



図1 鴨居玲《1982私》1982、石川県立美術館蔵

また、『道化師』と名のついたシリーズは、鴨居玲個人としての人格と、他者の目がある上で、作家としての鴨居玲との葛藤や解離が描かれていると私は解釈し『鴨居玲画集CAMOY 1928-1985』内の宝木範義氏のコメントで類似した内容が語られている。このことから、私は他者からの評価や社会構造、社会的立場から個人の人格形成に影響し、それを強要されている状況、道家を演じ本来の自身を埋没させている状態を描いている点で「道化師」シリーズは「空気」や「同調圧力」、「自己疎外」と関連する作品類であると考察する。



図2 鴨居玲《出を待つ(道化師)》1987、個人蔵

(2)「シニカルリアリズム」について

方力鈞は「シニカル・リアリズム」を代表する中国の作家である。まず、「シニカル・リアリズム」について牧陽一著『中国の現代アート』から引用する。

「玩世」現実主義。虚無に浸り冷やかに世間を傍観する。物事を茶化して不遜に振る舞う態度。気だるく、アンニュイな雰囲気。

(牧陽一2007:37)

また同著において、方力鈞の「浮遊する身体」について言及があり、引用をする。

自らが頼りなく、拠り所を持たない彼らの精神世界を代表するだろう。

(牧陽一2007:37)

私は、方力鈞の「浮遊する身体」に対し、水面に浮遊する身体は引用文からも解釈されているように、方力鈞自身の精神的な状態を表現していると考察する。地に足が付かず、水流のままに流されていく様、また流れに抵抗せず、現象のままに浮遊する行為は、自らの意思や思考、判断、行動する意識を、自身を取り囲む周りの環境により抑圧されている現実の状況と重ね合わせた表現だろう。以上により、方力鈞が過ごした当初の抑圧的な中国情勢から、「自己疎外」と類似する点が多く挙げられるのではないだろうか。



図3 方力鈞《無題》2005、個人蔵

(3) 石田徹也について

石田徹也の作品集『石田徹也ノート』において解説を行っている学芸員 江尻潔氏は石田徹也作品に対して「石田の場合、成長段階における外傷もさることながら社会に出ることにより生じたさまざまな傷が作品のモチーフとなっています。一言でいうならば自己疎外による傷です。」と論じている(石田徹也2013:5)。その陰鬱で抑圧的な作風は上述した「シニカルリアリズム」とも通ずるのではないか。具体的には、図4作品は電車や線路といったインフラストラクチャーに該当するモチーフと石田徹也本人を画面に構成することによって人物の「自己疎外」を表現していると私は感じる。まず、電車や線路は人物を取り囲むように配置されている。これは石田徹也を取り巻く社会関係、規範を表現している。人物は背景と同化するように、木々や岩肌が身体に描かれ、体内を通るように線路が配置されている。人物は横たわり、木々や岩肌、線路の様子から長い時間この姿勢のまま過ごしているように捉えることができるだろう。人物の様相から解釈するに、長い時間をかけて社会に溶け込んだ結果、人として接せられるのではなく「労働力」として扱われた結果、自ら思考することを忘れ環境に適応するように他者からデザインされていく。以上のように、外界の影響によって本来の自己意識が埋没している構造を描いていることから、「自己疎外」との関連作品に該当する。



図4 石田徹也《搜索》2001、横浜美術館蔵

また、江尻潔氏は同書にて石田徹也が資料としていたフロイトの思想を引用、要約して「フロイトはハイムリッヒ(慣れ親しんだもの)がウンハイムリッヒなもの(不気味なもの)に移行する理由として、なじみのものが抑圧されて疎遠になっていったためとしています。」と述べている(石田徹也2013:5)。この引用箇所を「同調圧力」や「自己疎外」に当

てはめると、自身やそれを取り巻く環境が社会的抑圧を受けることで本来の社会活動から切り離され、安全地帯であるはずの家庭や友人も組み込まれることで、自身を形成する上で必要な性質が阻害されていくように考える。

5. 表現について

今回の研究では、まず「自己疎外」を念頭においた「写生」、次に文献や参考作家による「自己疎外」の探求、最後に展示方法による「異時同図法」を用いた「過程」の構想の3つのプロセスから作品の研究を行った。

(1) 対看写生について

私にとって写生とは、単に対象を描き映す行為ではなく、そこに自己の意識と解釈を投影させ、対象を誇張解釈するための所作である。自身の自己疎外感を意識できるモチーフを探し、「対看写生」を行うことで、感覚として「自己疎外」を自らに落とし込む作業を行う。

「対看写生」は、河野元昭著『日本絵画史の研究』の中で4つの写生方法の一つとして提唱されている。4つの写生とは、それぞれ「生意写生」、「客観写生」、「精巧写生」、「対看写生」である。「対看写生」について、東京九段耀美術出版『耀美術ジャーナル 2024』の金子朋樹著「写生考-写生を通して、現場で考える-」において以下のように考察および解釈されている。

「対看写生」は「対象を観ながら描写すること」とあり、対象の観察という眼前の対象を尊重する要素がより強く含まれる現代の写生の概念に最も近い。これは、しばしば用いられる「スケッチ」という言葉の意にも近く、対象と自己を取り巻く関係性も重要になってくる。(金子朋樹2023:9)

以上を鑑みて、この「対看写生」が私自身の写生に該当するのではないかと考えた。一方で、アートや表現が複雑化した現代、写生も上記の4つに分けられないだろう。

私は写生を行い、描く対象を選択するとき、モチーフに対し、自己投影をすることが多々ある。例えば、図5の写生は自身の自己疎外感を意識し、当てはまる場所や構図を選択した。雪の積もる不安定な山道に立つ枯れ木に、身動きが取

れないまま冷たく、自身の感覚や思考も薄れていく様子が、私の自己疎外感に共通していた。このように、私は自己意識を対象に投影し、共感する点を描いているため、新たに「投影写生」を写生の型として定義したい。



図5 渡邊佑也《自己疎外を意識した投影写生》2024、作家蔵

(2)「連続性」について

次に、文献や参考作家による「自己疎外」の解釈と表現の探求である。これは感覚として落とし込んだ私の自己疎外感を客観的にプロセスとして認識するための行為であり、思考としても解釈することで、疎外が起こる「原因」や「過程」そして「改善方法」を探るためである。

カール・マルクスの『資本論』には、本来の労働は「構想」と「実行」という二つの要素で構成され、労働者はそのどちらも担う状態が正常であると定義している(マルクス2021)。「構想」と「実行」について簡単に要約すると「商品構造や事業計画を考えること」と「それら商品を実際を作ること」と解釈することができるだろう。また、今後の労働は「構想」と「実行」が分離され、大半の労働者が更に細かく分化された「実行」のみに従事することで「実態や構造のわからない労働」を行うことになるという警鐘だと私は解釈する。更に、「構想」の機会が無い労働者は個性が奪われていく者も少なくないだろう。これをカール・マルクスは「自己疎外」の内、「労働の疎外」と呼ぶという。

私は、上記の「自己疎外」のプロセスから方力鈞と石田徹也に共通する点として、同じ顔や表情の人物を一つの作品内に反復性を用い、複数人登場させることで、没個性化を強要させられている群像という印象を受ける。この表現により2名の作家から「自己疎外」を感じることができるのではないかと。

今回、私の作品では反復性の要素として「樹氷」をモチーフとして選択した。氷を纏い、凍結した枯れ木の群生

から、私には「自己疎外」を実感する群衆の形にも捉えることができる。私は樹氷と自らを重ね合わせるイメージが想起できた。樹氷(自己)は冷淡な環境にいるがために、あるべき自分らしさが心腐(しんぐされ)、自身にも同じ温度の衣を纏わされているように感じている。そのイメージを画面に表現したいと考えた。



図6 方力鈞《No.3》1992、福岡アジア美術館蔵



図7 石田徹也《燃料補給のような食事》1996、静岡県立美術館

(3)「絵巻物」と「マンガ」の「コマ割り」による「過程」の構想

作品では「瞬間」ではなく「過程」を意識した制作を行うためパネルを複数枚に分け、「異時同図法」を用いた時間の流れや意識の変化を表現したい。

2章にて思考の成長の段階であるG.W.F.ヘーゲルとカール・マルクスの「自己疎外」を取り上げた。G.W.F.ヘーゲルの『精神現象学』では、「自己疎外」は精神的成長や

学びの段階であると論じている。私の作品では、「大和絵」の内、「絵巻物」や「マンガ」の「コマ割り」を使用し「過程」を表現する。「絵巻物」の特徴として挙げられる表現は、「過程」が右から左へと物語が展開されていくことだろう。場面が続く限り、一枚絵として描かれていることも挙げられる。対して「マンガ」の「コマ割り」にはそれに加え上から下へという上下の誘導があること。更に、遠近の視線変化がある。また主に、決められた場面の大きさがあり、ページごとに右上の「コマ」に続くというルールがある。

以上の2つの要素を組み込んだ。具体的には、「絵巻物」の特徴である半永続的に右から左への過程(物語)の構想と、「コマ割り」による上下の要素、遠近の視線変化を一つの作品として接続させることである。

なお、本研究では「ページ」による視線誘導ではなく、「コマ割り」による視線誘導に焦点を当てるために「ページ」の要素には触れていない。



図8 作者不明《国宝 鳥獣人物戯画 甲巻 部分》平安時代、高山寺蔵



図9 渡邊佑也《作品の試作原案》2024、作家蔵

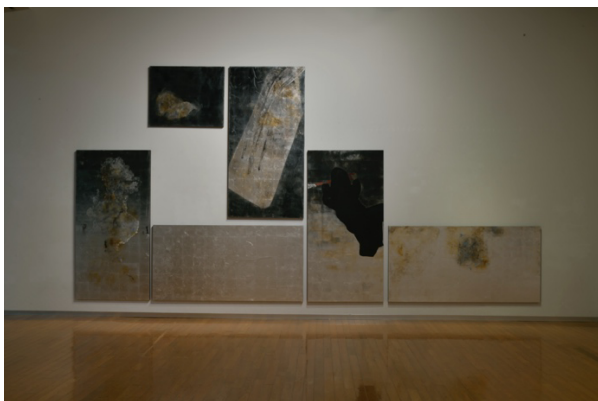


図10 渡邊佑也《作品の途中経過》2024、作家蔵

6. 終わりに

今回の研究では「同調圧力」が引き起こす影響の一つとして「自己疎外」を挙げた。この研究は、私自身が昨今まで自己疎外感を感じているがためだ。自分の身の回りにいる友人や知り合いにも同様の思いを吐露する者が少なくない。では、この感覚が私の属するコミュニティだけにおける事象なのだろうか。近年、ニュース番組やSNSにて「いきづらさ」を議論している場面を見かけることから、既に私事ではないのだろうか。私は、この「いきづらさ」の正体こそ「同調圧力」による「自己疎外」なのではないかと考察し、研究するに至った。

では、昨今の「自己疎外感」の原因が「同調圧力」であるならば、「同調圧力」の緩和こそが解決の糸口になるのではないかと考えた。先行研究で取り上げた太田肇著『同調圧力の正体』では、幾つかの解決、緩和方法が挙げられている。しかし、組織内の構造、意識改革や数人での対処が主な方法であり個人で行える方法はむしろ、迎合することを提案している。

制作研究では、「自己疎外」の「過程」を段階的に表現するため、絵巻物とコマ割り表現を取り入れたことは成果の一つとして挙げたい。しかし、「過程」の中での執着地点、「同調圧力」や「自己疎外」を「個人」としてどのように対処するかについては、今後も考えていきたいと思う。

「いきづらさ」の正体が「自己疎外」であり、「自己疎外」の起きる要因の一つが「同調圧力」だとすると「同調圧力」を紐解くことが鍵となるだろう。しかし、考察で述べたように「自己疎外」や「同調圧力」に対して「個人」としてできることは非常に限られている。

現状の結論として、「個人」として出来ることは、一人でも多く、この問題に気づきが得られるよう「行動」をすることと、解決のための話し合いの「場」を提供することだと考察する。

私は、個人としてその「行動」と「場」を「アート」や「作品」として提示していきたい。

参考文献

- ・石田徹也『石田徹也ノート』求龍堂、2013年、江尻潔「「痛み」としての地図」
- ・鴻上尚史、佐藤直樹共『同調圧力 日本社会はなぜ息苦しいのか』講談社、2020年
- ・長谷川智恵子『鴨居玲 死を見つめる男』講談社、2015
- ・山本七平『空気の研究』文藝春秋、2018年
- ・瀧佛三『一期は夢よ 鴨居玲』株式会社日動画廊、1991年
- ・『鴨居玲画集 CAMOY 1928-1985』日動出版部、2001年
- ・太田肇『同調圧力の正体』株式会社P H P 研究所、2021年
- ・「石川美術館ホームページ」https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/collection/index.php?app=shiryô&mode=detail&data_id=1542最終確認日:2024年9月4日
- ・「GALLERY 1 画家 石田徹也の世界」<https://www.tetsuyaishida.jp/71843/gallery/gallery1/>最終確認日:2024年9月4日
- ・「平凡社ホームページ」<https://www.heibonsha.co.jp/book/b625247.html>最終確認日:2024年9月4日
- ・石田徹也『石田徹也ノート』求龍堂、2013年
- ・斎藤幸平『ゼロからの資本論』NHK出版新書、2023年
- ・牧陽一『中国の現代アート』講談社選書メチエ、2007年
- ・竹田青嗣、西研『超解説! はじめてのヘーゲル『精神現象学』』、講談社現代新書、2010年
- ・G. W. F. ヘーゲル、熊野純彦訳『精神現象学 上』ちくま学芸文庫、2018年
- ・G. W. F. ヘーゲル、熊野純彦訳『精神現象学 下』ちくま学芸文庫、2018年
- ・斎藤幸平『ヘーゲル『精神現象学』 2023年5月 (NHKテキスト)』NHK出版、2023年
- ・太田肇『同調圧力の正体』株式会社P H P 研究所、2021年
- ・斎藤幸平『カール・マルクス『資本論』 2021年12月 (NHK100分de名著)』NHK出版、2021年
- ・古市保子、中本和美編『方力鈞 物語なき時代の人間像 Fang Lijun』国際交流基金アジアセンター、1996年
- ・東京九段耀美術編『耀美術ジャーナル 2024』東京九段耀美術、2024年
- ・「CURIOホームページ」<https://curio-w.jp/artist/方力鈞>最終確認日:2024年9月4日(ファン・リジューン)
- ・「web太陽 — webtaiyo — ホームページ」<https://webtaiyo.com/extra/11852/>最終確認日:2024年9月4日
- ・「Google Arts & Cultureホームページ」<https://artsandculture.google.com/asset/series-2-no-3-fang-lijun/cgHTIQmvpHyGdQ?hl=ja>最終確認日:2024年9月4日
- ・「平凡社ホームページ」<https://www.heibonsha.co.jp/book/b625247.html>最終確認日:2024年9月4日
- ・「福音館書店ホームページ」<https://www.fukuinkan.co.jp/book/?id=6787>最終確認日:2024年9月4日